



企画にあたって

大門雅夫 (東京女子医科大学循環器内科 臨床教授)

画像診断は、すべての循環器疾患の治療方針決定や治療効果判定に不可欠なものです。循環器領域における画像診断の進歩は目覚ましく、近年は心エコー図検査、MRI、CT、心筋シンチグラフィ、PET などさまざまな画像診断が日常診療で用いられるようになってきました。こうした画像診断の進歩により、形態的な異常評価のみに留まらず、炎症や浮腫、線維化など病理学的変化、血流の異常なども可視化・定量化可能な時代となっています。さらに、これまで画像診断の専門家にゆだねられていた診断についても、人工知能（AI）を用いることで、より迅速かつ正確に行える時代を迎えようとしています。一方で、画像診断が多様化したために、それぞれの疾患で画像診断を十分に活用できていない状況も目にするようになりました。様々な画像診断が発展した現代においては、それぞれのモダリティの長所と短所を理解したうえで、病態に応じた多角的に複数の画像診断を組み合わせたマルチモダリティ診断を行う必要があります。

本特集では、改めてさまざまな循環器画像診断を包括的に取り上げ、その活用法と最新の知識を専門家に解説していただきました。是非とも、本特集を役立てて最新の循環器画像診断の知識をアップデートしていただき、臨床の場でご活躍いただければ幸いです。